【特別講演】

北海道の古代史

——昭和32年6月1日，札幌市における土木学会第12回通常総会において講演——

更科源蔵*

盛装したアイヌ

北海道の土産というとアイヌと熊に関係したものが多く，また北海道に来る人は，たしかにアイヌと熊に多かれ少なかれ興味を持つている。なかには今も北海道中どこでもその姿を簡単に見られることと思つている人も多いようであるが，実際は土産品の中にその面影をしのぶにすぎない。しかし，たしかにアイヌ民族にしても熊にしても，いろいろな点で興味深い問題をもつていることはたしかである。

第一に北海道の熊であるが，これは本州産の月ノ輪熊ではなくて，すなわち熊という字の動物でなく，羆という字での動物なのであり，これは大陸系のものである。このほかにエゾ狼といわれた狼はやはりシベリヤ系のものであり，シマリスやナキウサギなど大陸系の動物が多く，逆に本州産の猿とか猪やキジがいないので，古くから生物学者達は，それほど古くない時代まで北海道は大陸の一部であつたのではないかといい，考古学者もこの生物相から推定して，北京猿人やジャワ猿人など四万年前の猿人の骨が東洋からばかり出るから，その大陸続きである北海道にも古い時代から人類が生棲していたのではないかと調査を進めていたところ，四，五年前日高海岸からマンモスの臼歯の化石が発見され，大陸説が一層強力に裏づけされると前後して，後志(シリベシ)の樽岸というところからこれまで発見されなかつた旧石器が，考古学者と地質学者の協力で発見された。ついで北見の上白滝というところでも，地下3mほどの鉄道切割りのとろから，やはり旧石器が発見され，これまで四，五千年前と言われていた北海道の人類生棲説が，八千年から一万年前と推定されるようになつた。そうした旧石器がこれまで発見されなかつたのは，その後に大雪山が爆発してそれらの人々のうち死滅したものも多かつたろうし，遺跡も地中深く埋もれ去つたからであろうといわれている。樽岸のものはその影響を受けなかつたらしく，割合地表に近いところで発見されている。とにかく現在までにわかつた北海道の最も古い姿というものは，以上のようなものであつた。

さらに北海道から発掘される土器についてみると，現在千歳線が通つている石狩低地帯といわれている石狩町から，苫小牧市にかけて地図の上に緑で記されている地帯と，ここを境にして東北部のものと西南部のものとは系統を異にしているということである。東北部からでるものはシベリヤの森林地帯から北欧，北米カナダ地方にまで，地球上の北半球の森林帯で狩猟生活をしていた人々と同じ系統のものであり，西南部から出るものは支那大陸や蒙古などの草原地帯から出るものと同じ系統のものであるという。そうだとするとこれらの遺物を残した民族が北海道に住んでいた頃には，北海道という島は現在のような形ではなく，東北部の方は大陸の半島の突端であり，西南部は津軽海峡がなかつたか，あるいはあつてもそれほど原始民族の交通の邪魔をしない程度のものではなかつたと思われる。それが後に津軽海峡が次第に広くなり，同時に宗谷海峡ができて東北部も大陸から分離して，なお石狩低地帯のところは埋まらず2つの島になつていたが，何度かの樽前(タルマエ)や恵庭(エニワ)の噴火によつて次第にこの海峡が埋められ，今日のように一つになつたのはそれほど遠い時代ではなかつたと思われる。ここが海峡であつたという証拠としては，千歳の近くにある長都という沼の中から鯨の骨がでたり，井戸を掘ると10mく

踊るメノコ達

* 北海道図書館　郷土史研究家

らい地下から貝殻がでたり，また長都沼の近くに馬追という地名があるが，これはアイヌ語のマウオイで，ハマナスのあるところという意味で，海浜の砂地でなければないこの植物が，現在でも退化した姿でこの海のないところにあるのは昔ここが海浜であつたことを物語つている。アイヌの人達もここから東北部をポロモシリ（大きな島）とよび，西南部をイエンモシリ（尖つた島）とよんでいることによつても，彼等の祖先の記憶の中にもここが2つの島に分れていたことを物語るものである。

人　類　史

ではこの2つの島にどんな民族が住み，地中にどんな文化遺物を残したかというと，いろいろな民族が永い時代の間に幾変転の歴史をくり返したので，決して単一な民族の歴史があつたわけではない。最後に残つたアイヌ民族もこれらいろいろな民族の文化や血液の影響を受けているものと思われる。オホツク海岸から太平洋岸の東方にかけて，素麺状の細い粘土をはりつけた模様の土器をもつていた。いわゆるオホツク式土器人といわれている民族は，東北部でも限られた地方だけしか遺物が発見されていないし，網走のモヨロの遺跡から発掘されたモヨロ族とよばれる民族は，下顎骨が普通の人間の倍もあつて非常に太く，臼歯に真珠をはめている。これらの人骨の民族も他に類を見ないものである。さらに北海道の各地から発見されたストンサークルを残した民族や，小樽付近の洞窟の壁にいわゆる古代文字といわれる壁面彫刻を残した民族など，また余市から積丹（シャコタン）半島にかけて積石塚を残した人々など，数えると数限りない民族遺跡がある。これらの民族が一万年に近い北海道の人類史の波を画いているのである。

アイヌ民族とは

以上のように北海道の永い歴史の上には無数の民族の足跡があるが，近々五，六百年来日本民族がこの島の記録を残すようになつてからは，いわゆるエゾと呼んでいたアイヌ族の独壇上であつた。アイヌ民族も前述したように単一な民族ではなく，接触した他民族との間に混血があつたことは，大和民族といわれる日本人が多くの民族との混血であると同じである。日本の昔話に天狗であるとか酒天童子であるとか，熊襲の話が出てくるように，アイヌの伝説にも蕗の葉の下で生活しているというコロポックル（蕗のかげの者）といつて蕗の葉の下に何十人もいた民族が出てくる。この民族は手芸や漁撈がたくみであつて，入墨もこれらの人々に習つたといわれているし，現にこの民族の子孫だといつている者もある。蕗の葉の下にいたから必ず小さいとは限らないので，おそらくこれは大陸の天幕生活をしていた遊牧民族のような生活者が，蕗の葉をもつて家をつくつて生活していたことがこの名になつたのではないかとも思われる。アイヌ人達も山狩などするときには蕗の葉を狩小舎の屋根にして三枚も重ねると1カ月くらいは雨もりしないといつて，蕗の葉でつくつた狩小舎をコロハムクチャ（蕗の葉の狩小舎）という名で呼んでいる。またキムンアイヌ（山の人間）と呼ぶ強力な，丈は人間の倍くらいもある全身毛だらけの大男が山奥の密林に住んでいて，走ることが早くて熊や鹿を蚤でも捕えるようにつかむことができる。人間（アイヌ）を見ると生捕にして殺すこともあるが仲間にする。木を伐るのに上から伐りおろさず，大斧で下から伐り上げ，雪の中を歩くとき雪輪を使うが，アイヌの履く雪輪（テシマ）を半分にしたようなものであり，非常に兇暴であるが煙草を見せるとニコニコして喜び，熊でも鹿でも獲物をいくらでもお礼にくれるというのである。この話でわかることは大男の狩猟民族であつて，雪の中を歩く方法を知つていて，しかも煙草を愛用していたものであるということである。これもおそらく大陸から漂流してきた一民族ではないだろうか。北海道の各地に悪魔の化けたといわれる岩がある。悪魔というのは狩猟や漁撈の邪魔をしてアイヌの生活をこまらすものであり，その砦なども残つていて遺物がでてくるが，それほど特長があるわけではないから，他民族であるのか部族のちがつたものであるのか不明である。同じ時代頃と思われる二つの砦の一方には祭事のときに酒をささげるが，一方のものには全然関心を示さず，むしろ悪意をもつていることさえある。これらいろいろの他民族との接触のあつた伝説があり，また一方には熊の子孫であるとして，熊を特別大事にし身体の毛が多いなどといつて，身体に毛の少い人々をあれは鯱の子孫であると区別したり，先祖が雷であるとか白鳥であつたとか，または梟であつたという人々もある。伝説の中に阿寒の山が鯱の妹と結婚したというような話も伝えられ，一見はなはだ奇異な感じを抱かせるのであるが，これらの祖先説は熊を一番大事にした部族は熊を祖先だとし，それぞれ最も大事にした神の子孫であることを誇りとしたものと思われる。阿寒の山を最も大事にした部族の長が鯱を大事にした族の長の妹と結婚したということを，原始文学的に表現したのが山と鯱の妹の婚縁伝説となつたものであろう。

山奥で狩猟生活を主体とした狩猟族の人々は当然ながら熊を大事にし，山の尾根の狩場を表わす先祖の印を木幣の頭に刻みこみ，海浜で漁撈を生活の中心とした人々は，沖にいて小山のように大きくて人の手に負えない，食糧庫のような鯨を殺して波の間に間に送つてよこす鯱を最高神にするのは，これもまた当然すぎるくらい当然のことである。これらの人々が神に捧げる木幣には，鯨をほふる鯱の大刀である鰭の印（アシペノカ）を先祖の印としている。また川の漁で生活を支えていた一族は部

落を支配する神（コタンコルカムイ）として縞梟を最高神としている。この神は万物が眠る夜の世界に目覚めていて，闇にまぎれて部落に近よる魔神をどなりつけ，夜のうちに鮭を漁つて，のどのあたりを少し食べて，あとは部落の人々のために川原に置いて行つてくれるというのである。縞梟は鮭をとるので鮭の産卵場の近くに家をたてる人間と，自然漁場が同じであるところから，部落の夜に叫ぶ神となり，必要なところだけを食べて余つたところを残して行く神であるとした。この神にあげる木幣は先祖の印のかわりに，梟の耳毛を表わす印をつけるのである。ある人はこれを分類するのに熊族，鯱族，梟族ともいつているが，熊族と鯱族とが結婚したときとか，鯱族が山に住んで狩猟生活をするようになると，両方の印をつけた木幣をつくるようになるから，これらが純然とした部族を代表，表現するものであるかどうか，まだ研究の余地がある。さらに墓標などの形式にも地方差があつて，東北部では男は又木であり，女のはT字型の木をたてるが，元来これは山狩をして歩くときの杖を持たしてやるという意味で，日本の法名などを書くものとは似て非なるものである。死者は来世に行つてもこの世と同じ生活をするが，季節と昼夜が逆になり，歩くときもこの世とは逆に頭を下にして歩くのであるが，この世と同じように鹿を狩り魚を漁る生活をするので，それに必要な道具を持たしてやらなければならない。墓標はその山歩きのときの杖であり槍なのである。これが西南部の方では男のは又木ではなくてはつきりとした毒槍の形になり，女のものは縫針になるが，さらに石狩川筋では男は単なる槍の形をつけ，女は一本棒をたてるだけである。これらが皆ちがう部族であるが，接触民族との交流文化の差異であるかについても，面白い研究課題となるであろう。

さらに西南部と東北部との差として面白いことは，西南部にはいろいろと母権制らしい痕跡が多く残つていることである。まづ東北部でも男山（ピンネシリ）と女山（マチネシリ）があるが男山は男性的な山をそうよび，女山は女性的な姿をした山に名づけられているのに対して，西南部では女山は大きく男山は非常に小さく（羊蹄（ヨウテイ）山は女山で 1 893 m，前方羊蹄といわれている男山は 1 107 m しかない）問題にならない山であるし，山の神様は女神であつて，この神様からさづかつた獲物（野獣類）は神々だけが出入りする神窓から家の中に運び込まれ神壇の前に飾られるが，河の神である老男神からさづかつた獲物はほとんど神窓でなく，特別な入口から入れられて，あまり大事にされないなどの区別をされ，女性関係のものを重視する傾向がある。

昔の生活と熊祭

現在はアイヌ民族というものはすでに現存しないという方が正しいかもしれない。少くともアイヌ文化をもつている人々はいないということができ，しいていうとアイヌ系の日本人が多少いるが，実数がどのくらいかということは全く不明である。それは明治の初めから戸籍も日本人と同じになり，教育も生活も全部日本人と同じで特別のありかたがなかつたからである。

明治以前の生活も地方によつて日本人と古く接触した地方と，そうでない地方とでは相当の差があるが，大体においては夏は海岸で漁撈の生活をし，そのための部落をサッコタン（夏部落）と呼び，冬が近よつて海が荒れて不完全な舟では漁撈ができなくなると，川を遡る鮭を追つて川上に入り，ここで鮭漁をして越冬の準備をするが，さらに厳しい冬に向つて狩猟生活に入つてゆくのである。獲物の多少によつて生活が常におびやかされる冬の生活の不安から，農耕民族が耕作に入る前に豊作を祈願すると同じように，豊猟の祈願をするのが熊祭なのである。アイヌの人々の熊に対する観念は，熊というものは今日の生物学的生き物としてではなく，自分達のところへ食糧品（土産品）を持つて遊びにきてくれる賓客として考えている。大体アイヌの人達の神々は鳥の神は空に神の国があり，海獣や魚の神の国は海のはるか沖であり，野獣の神々の国は奥山の山の中央部にあると考えている。熊はその山奥の神の部落にいて，ときどき人間の御馳走やユカラ（叙事詩）がききたくなると，黒い毛皮の外套を着て，肉というお土産をさげてノソノソと人里近くにやつてきて，心の清らかな神に取扱いの立派な人間の家を訪問するのである。冬の初めから行われる仔熊を送る式は，春の雪山の穴で得た仔熊を家にともなつてきて，自分達もめつたに口にしない御馳走をし，人間界の家族の一員として飼育し，狩猟生活に入る前に部落（人間界）の代表者として神の国へ旅立つて行く。冬に向つて人間の部落では非常に生活にこまつている。しかし人間の部落はなかなか面白いところで，冬にも天から木の実や魚が降つてきたり（熊祭のとき胡桃や乾魚を天に投げ上げてばらまき，人々が争つてそれを拾う），酒もどつさりあるし，とても面白いユカラ（叙事詩）という物語もあれば，女達の歌や踊りもあると親兄弟や親類友人達に宣伝してもらうのである（山に帰る仔熊にたのんでやる）。そうするとそんな面白いところなら皆も行つて見ようでないかとぞくぞくとやつてきて，部落の生活は豊かになるというのである。神様を大事にし祭を盛大にする部落には，より多くの神々が集つてくるのである。これは熊ばかりでなく狐も狸も狼，梟や鷲懸巣から海では鯨の寄つたときとか，鮭などの漁期にも同じような祭が行われたのである。明治の初めから表面的には全く平等な取扱いを受けたために，鮭も鹿も自由にとれなくなつたために，それらに付随して行われた祭はすつかり滅びてしまい，現在なお行われているものは熊祭りのほかに

胆振(イブリ)鵡川のシシャモ祭（シシャモとは柳葉魚という小魚で北海道の太平洋岸の特定の川で，初冬 11 月頃にわづか二，三日産卵に溯るときに漁がある）と，釧路塘路(トウロ)湖の菱実祭（ベカンベカムイノミといつて菱の実が稔つたのを感謝し，採集中にあやまちのないように沼の神や四方の神々に祈願する祭）だけであつて，これらだけはまだ自由にとることができるから，わづかに昔の面影をとどめている。熊祭もすでに昔のように生活と密接した信仰としてではなく，異様な風習として観光資源的に行われるにすぎない。この熊祭は何もアイヌ民族だけの特異な祭事ではなくて，前述したように北半球の北方森林地帯で狩猟生活をしていた 40 余種の民族の間で行われていた祭であり，その根本にはキリスト教とにている多くのものがある。最も大きな共通点は神は死ぬことなく復活するということである。現実にはたしかに熊の首を締めつけて殺すのであるが，それは神様の背負つてきたお土産を受けとるための手段であつて，決して神を締め殺すのではない。神を殺してしまつては山の神の国への伝言もできないし，再び人間界に遊びにこなくなつてしまうのである。要するに猟の獲物が種切れになつてしまうのであるから，殺してはいけないし，死なれたら大変なのである。どうしても永遠に生きていてもらわなくては困るのである。だからユカラの中で熊神自らがうたつたという文句の中に，首をしめられたときのことを「自分は一時気を失つていたが，フト気がつくと私は大きな熊の耳と耳の間に坐つていた」と物語るところがある。熊という物の姿から離れた神は耳と耳の間，すなわち頭に坐つて人々の祈りの言葉や，捧げ物を受けとつて神の国へ帰るのである。それで熊の頭骨のことをマラプトというが，マラプトは日本語の賓客（まろうど）であるといわれ，これを飾るのは又木であるが頭骨を飾つた下に横に一本の棒をしばりつける。これは頭骨を椎骨から切り離したりするときに下の台にする木であるが，これをしばりつけた形は又木の十字架といつた形であり，神はこの十字架の上から神の国へ復活し旅立つのである。さらに神様の置いて行つたお土産である血と肉（内臓）をナマで食べる。キリスト教では主の血だといつて葡萄酒をいただき，主の肉だといつてパンを食べてけがれた肉体を浄めるが，塩をもたない山狩の民族が生血や内臓を食べるのは生理的な要求であつて，肉食動物が他の動物を殺したときには，最初に内臓をむさぼり食べ血をすするのは生理的にそれが要求されているからである。それは別としてそうした狩猟民族が農耕民族にかわつたときに，宗教的儀式として血が葡萄酒に変り，肉がパンになるということは不思議でもなんでもなく，むしろ当然ではないかと思われる。もう一つは人間界の代表として神の国に行くということである。仔熊自身が人間の家族の一員として飼われ，すなわち人間としての生活をするのであり，人間そのものなのであるということである。

要するにアイヌ民族は多少他民族との間に争闘はあつたにしても，割合に恵まれた天産を独専して，北海道という島に原始のままの自然物採集だけで生活が成立つていたために，現在の文明社会をつくつている人々の先祖が，数千年前に経過した生活形体を，そのまま最近まで保持してきた，めずらしい存在ということができると思う。

入墨について

アイヌの入墨は女性だけのものであるが，現在入墨をしている人を見るということは，ほとんど絶無といつてよい。明治以前にも徳川幕府が禁止令を出し，明治以降にも熊祭や耳金をさげることと一諸に禁止されたのであるが，昔から入墨をしないで結婚すると神の怒りを受け，死んでから罰を受けるという言伝えがあるので容易に中止されなかつたが，日本の教育が実施されてからはこの風習もついに影をひそめてしまつた。これは唇と手の甲から二の腕にまで行われたもので，子供から娘になりかけたとき，すなわち初経のある頃から初め，少しづつ大きくしていつて嫁に行くまでに完成するのであつて，方法としては，きれいに洗つた鍋を火にかけて樺皮を焚き，その油煙のついたのをとつて，昔は黒燿石の小刀で傷をつけたあとにすり込むのである。どうして入墨をするかというのに対して，全道的にほとんど例外なしに，昔コロポックル（蕗の下にいたという小人）の女のやつていたのを見て美しかつたので真似たのであるといつている。ある学者は着物の模様が襟とか袖口や着物の裾にだけほどこされるのは，着物の隙間から身体に忍び込もうとする悪魔をおそろしがらせるためだといい，この入墨もそうした役目に考えたのではないかともいつている。たしかに着物の模様は綱とか草の蔓とか，蟹の爪，星の形などで悪魔にとつてはやつかいなものばかりであるから，あるいは悪魔除けの意味があつたかもしれないし，入墨もあるいはそうしたものだつたかもしれない。ある古老は「日本人が来て皆メノコ（女）を連れて行くから，入墨をしておつかない顔にして連れて行かれないようにしたのだ」と笑いながら説明してくれたことがあつたが，徳川幕府時代には北海道に定住しない漁場の支配人はじめ，妻子を連れて来ていない労働者までがメノコをおかしたり妾にしたりするということが普通に行われていた。面白いことに古老の話を裏づけするようなこともあるのである。それには日本人と接触の多かつた胆振(イブリ)や日高の海岸地方の人々の唇の入墨が非常に大きく，カイゼル髭のように耳のあたりまではね上つているが，十勝に入ると幅が広いがはねあがつてはいない。それが釧路や北見地方になるとただ口唇のまわり，現在の口紅をやつている程度の入墨になり，さらに樺太に渡る

と唇の上と下に稚子さんの口紅のように，点々とほどこされているだけである。この奥地に入るほど小さくなるということはどういうわけか？日本人との接触の少なかつた地方ほど小さいのである。そうだとすれば近づけないようにした悪魔とは日本人漁夫どもではないかという説も成立たないことはない。しかも初経の頃からはじめるということもうなづけないことではない。しかし私の知つている十勝のある老婆は，現在 90 才に近いが，独りで昔のままの家そつくり，電灯もストーブもつけず先祖時代からの生活をしているが，この老婆は胸のあたりにも入墨をしているので訊いてみると，娘の頃荒馬に乗つて木の株の上に投げとばされて，肩から胸にかけてひどい負傷したので，樺皮の油煙をぬつて血止めにし，蓬を煮立てて湿布をしたら，全然いたみも腫れもせずに癒つたというのである。そしてその老婆の話によると，昔は目が悪くなると目のところの血をとり，頭が痛いというと額のところから血をとつて，そのあとに樺皮の油煙をすり込むとただちに血が止るが，額のあつちにもこつちにも入墨ができて，まだらになり，きたなくなるからまとめてやつたのだと説明してくれた。しかしこれまで顔のまだらになつた人を見たという記録もないし，昔からの口唇と手の甲から二の腕にかけてだけであり，しかも男にはそうした例がないところから，やはり女性の特別な体質と関係があるのではないかと思われる。しかし現在のところまだはつきりした結論はなく，依然としてナゾの問題となつているが，火の神のさづけた血止め薬であつたようである。

地名について

地名については「おしゃまんべ」とか「くっちゃん」とか妙なのが多く，昔は「さねんころ」とか「べべつ」という誤解をまねくような駅名もあつてそれぞれ改名されたが，アイヌの人達は川を山に行く道としていたので，多くの地名は川の状態から名づけられたものが多い。また川は今日われわれが考えているような自然現象としてではなく，人間と同じに生きて生活しているものと考えて親（ポロ）があつたり子供（ポン）がいたり，当然夫婦関係もあれば肋骨になる川もあつたりで，そうした川という生活者に対して名づけたものもある。訳してみるととんでもない大変な地名になるが，日本語の発音ではわからないので無事にのこつているものもあれば，逆に先に出した例のようにアイヌ語では何でもないのに，日本語としての発音が悪くて敬遠されるものもあつたりで，なかなか複雑であり興味深い問題もあるが，今日は時間がないので，このへんで私の話を終る。

コンクリートパンフレット

各号共A5判1部 60 円 〒 10 円
全国丸善書店などでも販売中
他号は省略，御一報次第図書目録進呈

第18号 **コンクリート用骨材** （改訂2版）64頁
建設省土木研究所　伊東茂富氏執筆

第48号 **遠心力鉄筋コンクリートクイ** （改訂版）70頁
大同コンクリート工業K.K.
綾　亀一氏・中田重夫氏共同執筆

第50号 **コンクリート・マニユアル(抜萃)** 50頁
京都大学教授・工博　近藤泰夫氏訳

第52号 第53号 **建築のコンクリート工事** （上）70頁 （下）62頁
建設省営繕局監督課　小林　制氏 高橋幸雄氏 共同執筆

近　刊

第54号 **コンクリート工作**
京都大学教授・工博　近藤泰夫氏執筆

月　刊

セメント コンクリート

1部 50円（〒10円）

予約
1年　600円
半年　300円
（各送料共）

東京都港区赤坂台町1番地
社団法人 **日本セメント技術協会**
振替東京 196803　電話赤坂（48）8541～3

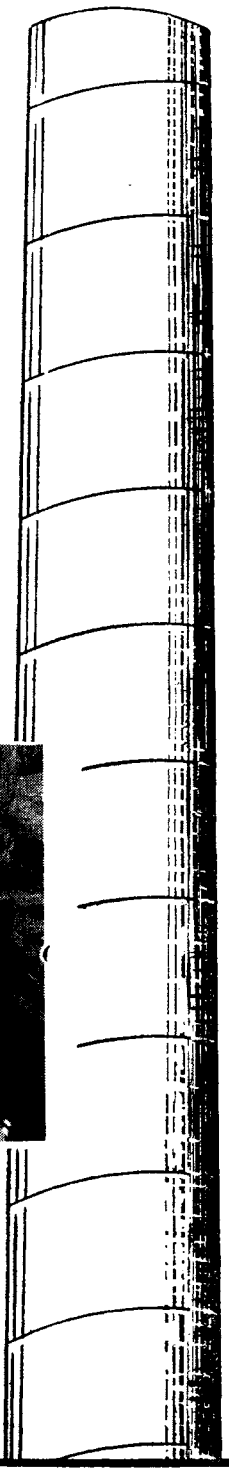
紙を螺旋状に巻きエンドレスパイプとした我国最初の新製品です。

フジチューブ

規格表　（特許申請中）

内径(mm)	50	100	150	200	300	400	500	600	700	800	900	1000
内厚(mm)	2.5	3.5	3.5	5.0	6.0	8.0	10.0	10.0	10.0	11.0	11.0	12.0

建築・土木の円柱建造に最適のものです。**フジチューブ**を立てその中にコンクリートを流し込むだけで正確な円柱が簡単に建造することが出来ます。

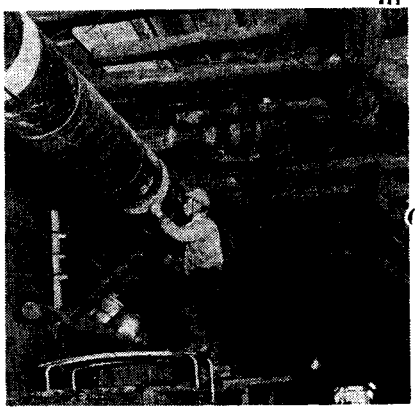


フジボイド

スラブの軽量化に使用されます。
スラブ又は壁体のコンクリート打ちの際、**フヂボイド**をせき板とせき板の中間に排列し、その周囲にコンクリートを流し込み、いわば継目なしのコンクリートブロックを現場にて作成出来る画期的な製品です。

フジエアーダクド

従来より隧道用の空気調整用パイプは、鉄板製のものが用いられていますが、非常に重く且つヂョイントに多大の手間を要しますが、**フヂエアーダクト**を使用すれば軽量で取扱い易く、而も価格が極めて低廉であります。



隧道用エヤーダクト施工の実況
（福島県只見線滝沢隧道工事）
鹿島建設施工

藤森建材株式会社

東京・東京都中央区日本橋通1の5（中内ビル）TEL（28）6271～2
大阪・大阪市西区土佐堀通1の1（大同ビル）TEL（44）0225・7569

（カタログ・見本進呈）